

自由民権運動期の広池千九郎

—義拳・挫折・展開、麗沢館退塾をめぐって—

櫻井良樹

目次

はじめに	2 麗沢館以前における広池千九郎の政治思想
1 麗沢館についての記述	3 麗沢館退塾事件について
1) 小川含章および麗沢館に関する従来の見解への疑問	4 退塾後の政治思想
2) 麗沢館で何を学んだのか	おわりに

はじめに

広池千九郎⁽¹⁾は、「世界永遠の平和の実現の基礎を成す所の一つの専門学⁽²⁾」として「モラル・サイエンス道徳科学」を提唱し、また日本政治の混乱期であった1930年代には、しばしば斎藤実や若槻礼次郎・鈴木貫太郎などに政治改革を提言した書簡を送り、みづから「もし私を総理大臣にして陛下が三箇年間自分に御任かせ下されなば、政治も経済も産業も教育も宗教もすっかり建てかへる事が出来る⁽³⁾」とも語っている⁽⁴⁾。

広池千九郎が、どのようにして日本政治の建て直しをしようとしていたか

については、すでにいくつかの研究がある⁽⁵⁾。しかし、広池の政治観の形成過程や変遷を追究したものはない。

本稿は、広池千九郎と近代日本政治史との関係を考察していく上で、彼の青年期（だいたい明治25年26歳ごろまで）である中津大分時代における政治思想を、麗沢館退塾事件を中心にして明らかにしようとしたものである。これはまた同時に、藩閥政府と士族反乱・自由民権運動の対抗という明治国家体制形成期における一地方人の精神史でもある。

1 麗沢館についての記述

広池は、大分師範学校の入学試験に失敗してから、その卒業資格試験（応請試験）に受かるまでの間、小川含章（弘蔵）のもとで学んだ。従来から、小川の影響、含章の設立した麗沢館の広池に与えた影響が大きかったことが指摘されている⁽⁶⁾。しかし、その位置づけが大きく評価されているのに対して、当時の遺稿で小川に言及したものは少ない。

まず少し引用が長文に亘るが、当時の遺稿の一つとして「初志録」（明治19年頃執筆）⁽⁷⁾の記述を掲げておく。

〔十六年〕九月三日、師範学校入学試験にかゝり落第す。〔中略〕依て①大分明倫会の設立に係る麗沢館に入る（麗沢館とは速見郡鶴川村士族小川弘蔵含章先生の塾にて、従来大分郡田尻村にありしを、②本年本月明倫会の周旋にて当地に移せし也）。是より一心漢学に熱中し、二、三月にして四書国語等の大義に通ず。

同年十二月、大分町士族木戸哲三郎、久留米士族高橋正明の二氏と謀り、③東京に脱走遊学せんとし、千〔中略〕

十二月廿日長池の善行寺より東新町来迎寺に麗沢館を移せり。④是より大分新聞〔報の誤り……注〕前の編輯長たりし大分郡皆春村後藤田鶴雄管事となれり。

予は明治十七年一月再び師範学校入学試験にかゝり、復落第せり。〔中略〕（予は十六年十月より速見郡日出村士族当時師範学校書記兼二

等助教諭⑤坂本永定氏に従ひ、算術を修業す。此行坂本氏に沮まれたれとも予聞かすしてこの恥を取れり）〔中略〕

同二月廿七日、予は〔中略……人名〕数十人と共に⑥同館を退塾せり。小川先生も亦此勢に際して辞職せり。

抑其原因を求むるに、⑦明倫会の社長平塚恰氏先生を侮り、且月給十円を滞らせ家政に不都合のある処に、近来諸生百余名に至り甚だ盛大なるを以て、先生の考にては我れ明倫会を退きて同地に開塾なすときは其東脩月謝毎月必ず二十円以上ならん云々の処に愆心の生せしなり（⑧先生の夫人は大坂にして、甚だ姦奸の毒婦なり。此等は皆此人の智に出づ。先生は實際愚直にして世事を知らず）。⑨依て我輩を教唆し、終に左の口実を以て我々が退塾の主旨となさしめたり。

一、若年にして未だ学文経験に乏し。而るに既に⑩明倫会に入り政党に籠絡せらるゝは我輩の本旨に非ず。其他之を略す。（右の主旨書等は中里等の工夫なり）。

予輩は退塾するや否や、稻荷町山口的の家を借り受け、之に先生を請して講義を聞き、毎夜明倫会の残生及其会員と攻襲止む時なし。然り而して明倫会よりは先生を破会すると云ひ又和睦すると云ひ、誠に曖昧然として筆紙に尽されず。時に三月某日、予は坂本先生を訪ふ。先生大に予に諭し速かに小川を去らしむ。而れとも予迷霧未だ醒めず、終に先生の言を聞かず。其後再三先生の教に由り纔かに其非を悟らんとして未だ悟らず。又⑪我党の人々は過激不品行日に甚しく、又之に諭す者なし。〔中略〕

⑫〔三月〕廿三日、帰省す。〔中略〕

予は⑬六月再び大分に至れり。予が帰て家にあるや、退塾の非を悟ること甚しく、後悔百状、⑭今や再び大分に至らば必ず小川を退塾し明倫会に入り、以て坂本先生に謝し、我後來の大目的を達せんと、初めて真正の理を悟りし也。依て大分に出づるや、直に小川先生に謁し大に其輩の非を諫めしかとも、諸生等却て我を悪み氷炭相容れざるの仇とな

る。依て予輩は朝倉平馬、加藤正夫等と左の退塾主意書に抛り退塾す。

坂本先生予を誡むるの言に曰く、汝諸生と共に約し⑭明倫会を退きたるは大に理に戻れり。因て速かに改過して明倫会に入るべし。若し而らざれば品行不正の態あるを以て、到底県立官立の学校に入る能はず。而かするときは汝等は父母の恩に背き、上不孝の子となり、下一身の方向を誤るなり。故に今汝が諸生と約したる言を渝ふるは不信なりと雖とも豈意に介するに足らんや。⑮英雄は大成を期す。尾生孝、己の行はなすべからずと。真に格言也。

小川先生麗沢館退塾の主旨

⑯明倫学会は我県下有志好學の士の相集りし純粋の学会なり。今小川先生は元來本会の会員に列し、副会長兼学校の教員の任を担当しなから、纔かに己の意に乖はず、⑰自家に捐耗のあるを見て、我輩を誑騙して以て己の私慾を逞ふせんとす。〔⑱故に予輩は全く小川先生の餌なり……抹消部分〕凡そ物他物を欺きうるものは利を得、欺かれて餌となるものは害を受く。我輩は今小川先生に欺かれたり。而らば我輩は害の其身に及ふこと必せり。必ず後來方向を失ひ、上は父母の恩に背き、下は一身の愁を招かん。是既に百人の同く視て然りとする処なれば、我輩は断して退塾をなすゆえなり。

之より予は十七年七月、大分師範校高等科卒業生堤恕作氏に従ひ、初等師範学科を学ぶ。九月に至り同氏は大野郡今市校に任用せらる。予は時に師なきを以て百方之を求め、或は西に或は東に、終に津留村⑲河野秀雄氏の養子、欣三郎（鶴崎の石黒氏の三子）氏に際会せり。〔中略〕

抑河野君は性質仁恕慎謹活潑にして、尤も世事に長けたり。⑳予の此人に頼るや家に柱の生せし如きものにして、予が初等科師範学科を卒業せしは全く此人の徳に依るなり。而るに其徳を酬ふること未だ遅し。真に恐るべき也。

1) 小川含章および麗沢館に関する従来の見解への疑問

広池が中津大分時代に記した記録である「初志録」・「履歴二号」・「履歴三号」の中で小川に言及した記事はこれだけである。これらの遺稿では傍線の⑦・⑨・⑪・⑬・⑮・⑰のように激しく小川を非難している。また明治22（1889）年5月小川の寿碑が門人の手によって建設されたが、広池がこれに関与した形跡は見られないし、小川の死去（明治27年3月）についても何の言及もしていない。「初志録」の記事とこのようなことから判断すれば、今までの過大な小川の評価は疑問である。

以上の記事の他に小川に言及したものが若干ある。それは数多くの履歴書類と『新篇小学修身用書』の記述である。『新篇小学修身用書』の記述は、小川の勤勉さを称賛したものであり、履歴書類に共通して見られる特徴は、漢学の素養を、「九州の高名な碩儒帆足万里の高弟」小川含章に授けられたという学問の「正当な経路」が示されている点である。大正年間に広池が自らの生涯について語ったいくつかの遺稿があるが、そこには小川についての記述はほとんど見られない。

ところが、昭和13年に口述された『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』（出版は広池千英によって昭和16年）では、小川に関する記事の量が突然増えている。その一部を下に引用する。

私は十七歳の春其市校を卒業致しまして、同年の夏に豊後に参り小川含章先生の麗沢館と云ふ漢学の塾に這入つたのであります。〔中略〕小川先生の塾に参りましたところが先生から度々御話がありました。それを聞いてみますとそれ〔国会の開設……筆者注〕は日本国家の大変革を來たす処の一大事件であると云ふ事が解つたのであります。小川含章先生は極めて勤王の志の厚い御方で御座いましたが去年（明治十四年）国会開設の御詔勅の降つた時に作つた詩と云ふものを御口吟になりました。其句は

国会開時我背世不知天下婦民權
王風漸廢國風興請看応仁乱後篇

と斯う云ふのであります。〔中略〕先生の申されますのには、一体我が日本の国家と云ふものは、日本の皇室の御祖先が我々国民の祖先を教育して、そうして我々に精神的・物質的のすべての生活の道を御授け下さったのであつて我々の祖先は何もかも一切の道を教へて下さった所の国の親に帰服して之によりて始めて日本と云ふ国家が出来たのである。

〔中略〕今回の事件は天威によりて徳川幕府から政権を天朝に回収し奉り、而して今日其立法権を国会に取らうと云ふのであるから足利尊氏と何処に択ぶ所があるかと両眼に涙を湛へられ大きな声で先生が憤慨されて我々門人を睨め廻はして御話に為つた事は五十七年目の今日でも実に深い印象を私の心に刻して居るのであります。〔中略〕今日小川先生の御詞を公平に判断して見ますれば益々誤つて居る事はないやうに考へられます。

小川の政治的位置（後述）および学問の経歴より、小川が以上のようなことを語ったこと自体は疑う余地はない。しかし問題は、広池千九郎⁰⁴がその生涯の終わりごろになってなぜ突然小川を引き合いに出して、皇室について語ったかである。『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』の他の記述と、中津大分時代に書かれた他の遺稿の記述を比較して見れば、たとえば森有礼⁰⁴に対する賛美の記述と『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』で森を批判している記事の違⁰⁴い⁰⁴が一つの例証になるように、『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』は広池の中津大分時代の思想を正確に表していないと考えられる。この問題については、昭和13年という日本が準戦時体制となっていた時代的影響⁰⁴が考えられる。つまり

- (1) 広池千九郎の当時（昭和13年）の思いを小川に託して述べた。
- (2) 小川の言葉がこの時始めて理解できた。
- (3) みずからを擁護するため、小川⁰⁴の言葉を引用し、国家主義を肯定しているよう見せかけた。

というようなことがその原因として挙げられる。したがって、この文章をもってただちに中津大分時代の広池の思想とすることは、史料的に見て疑問が

残る。

『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』の記事を引用して広池と小川⁰⁴の関係を、広池は小川の心酔者であつたと位置づけるより、むしろ「初志録」の傍線⑦・⑨・⑰・⑱のように小川を批判し、軽蔑するような感情が当時の広池にあつたと見る方が史実としては正しいのではなからうか。つまり、広池は小川含章を麗沢館在学当時はそれほど尊敬していなかった。また彼の影響を受けたとは思っていなかったとすることができよう。むしろ傍線⑲で述べているように河野欣三郎などを尊敬していたのである。しかし彼の漢学の基礎が麗沢館時代に養われた事は客観的に見て否定できないことであらう。

2) 麗沢館で何を学んだのか

では具体的に広池千九郎は麗沢館で何を学んだのであろうか。広池みずから数多くの履歴書で語っている通り、漢学の基礎は麗沢館での教育に負うところが多かった。また『新篇小学修身用書』で小川の勉学の姿勢を世間に紹介しているように、学問に対する態度も学んでいる。

さらに、当時の詩作から言えることを検討してみよう。「述懐⁰⁴」において広池は、「予の志す所は師範学校に入りて教員にならんと欲し、而して望む所は民を化し、国家を利するにあるのみ。然るに如何にして民を化し国家を利せんや。曰く、教員となりて日夜孜々として授業に勉励し、生徒に先んじて之をして業に励み善に移らしめば、則ち父母兄弟これを視て必ず喜び、願て遂に己を修め、以て之を一郷に行なわしめば、一郷おのずから風俗を改めん。隣校教員も亦これを聞いて終に予の術に倣わば、則ち二郷も亦おのずから風俗を易えん。一家仁なれば一國仁に興り、一家讓らば一國讓に興り、終に施して天下に及べば天下の民をして堯舜の民とならしむ」と述べて、教員となつて下から一歩ずつ世を良くしていこうという志を述べ、「明智光秀論⁰⁴」と「頼山陽之譏⁰⁴」では、王室を尊ぶことが君臣の大義であり、君臣の大義は犯してはならないこと、明治維新はこの大義を明らかにしたものである

ことを述べ、「題戦国⁶⁰」では戦国時代には君臣の大義（＝聖人の教え）を知らなかったため無秩序な社会状態を生んだとして、教育の重要性を指摘している。国家が一旦緩急に際したときには立ち上がるべきことを述べた詩や、民衆が国の本であり、民衆を大切にすることが国家興隆の条件であることを指摘した詩もある。「与玉川県令書⁶¹」（玉川県令とは実際には存在しない）では、改進黨者と保守主義者の両者を用いることが改革のためには必要であることを指摘している。

このような麗沢館時代の詩文より言える広池の政治思想は、『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』に述べられているほど国権論を主張するものではなく、まず修身齊家ということであり、君臣の大義を知り、大義に殉ずることが大切であるということ、これはつまり国家への奉仕ということでもあろう。また改革は過激にではなく漸進的であることが必要であり、それには教育が重要な役割を果たすということである。

2 麗沢館以前における広池千九郎の政治思想

では具体的になぜ広池千九郎は、麗沢館を退塾し、小川をあのように非難したのであろうか。これが明らかになれば「初忘録」の記述を説明することができよう。広池が明倫会麗沢館を退塾したときの主旨は、「一、若年にして未だ学文経験に乏し。而るに既に明倫会に入り政党に籠絡せらるゝは我輩の本旨に非ず」というものであり、麗沢館が政党と関係のあることが理由の一番に挙げられている。では、なぜ広池は政党に籠絡されることを嫌ったのであろうか。それを理解するには、退塾以前の彼の政治思想を検証する必要がある。

永添小学校在学中は幼年であるし、また小学校自体に特色があったかどうかは不明である。しかし中等教育を受けた中津市校は、福沢諭吉と旧中津藩の上士によって設立された洋学を主とした学校で、文明開化を率先して実行したことで有名であった。また西洋の自由主義の風潮を反映して、中津における自由民権運動の一つの発生源ともなっている。

ちなみに同時期、中津には国学を教える皇学校と漢学を教える進修館があり、市校とそれぞれ対立していた。皇学校は増田宋太郎らの設立によるもので、不平士族の反維新運動でもあった自由民権運動のもう一つの源となった。

この三校の様子から言うと、広池は洋学的雰囲気の中で学び、西洋流の民権思想を教えられていたことは十分に考えられる。

広池は後年（大正8年）、明治15年頃立憲改進黨に入り政治運動をしたと述べている。このことの実偽を明らかにするには、中津の政治史を通観する必要がある。中津では明治4年10月に旧中津藩上士山口広江・鈴木間雲らによって中津市校が設立されるとともに、それに対抗して増田宋太郎によって皇学校が設立された。中央政界における板垣退助らの民撰議院設立建白書の提出と自由民権運動の展開を受けて、中津でも明治7年7月増田らによって自由民権結社共憂社が設立された。一方明治8年11月には今の市議会にあたる中津公会が設立され（鈴木間雲議長）、自由民権運動のもう一つの推進母体となっている。明治9年11月には中津の自由民権の機関紙的役割を果たした『田舎新聞』が、山口半七・村上田長ら旧上士階級を代表するメンバーと増田を編集長として発刊されている。ところが明治10年3月、西郷隆盛が明治政府に反旗を翻して西南戦争が起ると、増田も西郷に忠じて拳兵する（中津隊）。それに対して、もう一方の自由民権運動の推進者であった鈴木間雲・山口広江らは増田に備え武装をすることになり、ここに中津の自由民権運動は分裂することとなる。

西南戦争終決後、中央政界での国会開設運動を受け明治13年2月には両毛・宇佐三郡総代の宮村某・飯田某が国会開設の請願をなしており、また福沢諭吉の影響を受けて明治12年から15年にかけては、「政治熱大に勃興し、結社、団体到る所に簇生するを見たり、多数の有志相会して親睦の宴を張り、時事を談じ政見を交換し、又は政談演説会を開く等、殆んど虚日無きの勢を示したり。〔中略〕当時中津町には共憂社、正従社、画一社、共立社、亦一社、一貫社等の多数結社ありて何れも政談演説を為し、就中亦一社は最も有力な

る人士を以て組織せられたる政社なりき」というありさまであった⁶³。明治15年3月には下毛郡有志者懇親会が開かれ、同年の5月7日には山口半七等によって大分(豊州)立憲改進黨が組織されている⁶⁴。このように、中津では明治15・16年頃には自由民権運動が昂揚しており、政治熱も高かったことが判る。また明治15年6月には下毛郡親睦会が中津公園で開かれている。その模様を広池は、「六月十八日下毛郡親睦会を中津公園地に開く、時に人心奮起会するもの略ほ五百人有志寄贈の物貨山の如し(当時は地方改進黨を執る者甚多く、此会蓋同主義者の会同に外ならず)」と記しており、この親睦会にはみづからが出席した可能性がうかがわれる。以上のような状況を見れば、広池が講演で語っている(豊州)立憲改進黨への入党は——入党とは言わないまでもそれらの集会への参加は、当時の周辺の雰囲気からして十分に考えられることである。

3 麗沢館退塾事件について

さらにもう少し大分県の政治史を見てみよう。明治15年前後、熊本の国権主義団体紫雲会の働きかけもあって、大分県でも回天社や毛利空桑の天壤社などの反民権団体が結成され、明治16年に入ると大分(豊州)立憲改進黨の設立に対抗して吏党が組織されることになる。従来は、この吏党が豊州会であると捉えられていたが、野田秋生氏は実はこれが明倫会であることを明らかにしている⁶⁵。この政党は「保守主義を執り中央帝政党の党議綱領を賛成し、躁急を避け秩序的進歩を図り従来政治制度を保持せんとする穩健派の人々、並に官辺縁故者等」により設立されたものであり、後藤田鶴雄はその中心人物であった。そして『大分新報』を機関紙とし、県令西村亮吉・警部長補平塚恰(『大分新報』は平塚が責任者であった)と結んで大分(豊州)立憲改進黨の機関紙である『南豊新聞』を⁶⁶。『大分新報』は県令西村亮吉の機関紙にして、其監督は警部長補平塚恰に一任されしものなり、主筆森本某は平塚が自己の郷里熊本より招致し、警察権と自己の機関紙とを以て改進黨撲滅の武器としたり、平塚の幕下警部吉野千尋菊地則常出事等は皆平塚の股

肱たり爪牙たる者、又名を育英に託して斯文学校を創立したる増川蚶雄、合志林蔵の如き、又武揚協会杯起せるも、皆西村亮吉と平塚恰とが改進黨撲滅の準備に他ならずと高称せり」と『大分県政党史』には記されている。西村県令は諸県令の中でも特に民党嫌いで、頻りに政党を圧迫したことで有名であった。

以上の記事から「初志録」の記事を解釈すると、まず傍線①「大分明倫会の設立に係る麗沢館に入る」、④「十二月廿日〔中略〕是より大分新聞〔報〕前の編輯長たりし大分郡皆春村後藤田鶴雄管事となれり」、⑦「明倫会の社長平塚恰氏先生を侮り」、⑩「明倫会に入り政党に籠絡せらるゝは我輩の本旨に非ず」という記事より、大分明倫会麗沢館では保守派の政治的圧迫が強くなっていたことが判る。そして、それを広池は「麗沢館劣生千九郎、憤本塾監事之近状……⁶⁷」という題名の詩に象徴されるように、不満に思っていたのである。

明倫会は明治16年5月17日に組織会が持たれ、5月23日に設立の届けが出されている⁶⁸。会長は豊前の国学者毛利空桑であり、その組織会には小川弘蔵・平塚恰・後藤田鶴雄を含む37名が出席し、名簿に記載されている会員数は大分県の各郡に互って約三百余名であった⁶⁹。また「明倫会趣意書」には以下のように記されている(カタカナをひらがなに直し、適宜句読点を加えた)。

我が日本帝国南州の臣民同志若干名恭く惟みるに維新以来歳月を経過すること、纔に十有六年、人智の進長文物の繁瀾なる古来未だ曾て聞かさる所にして内治外際国家の多事も亦今日の如は非らざるなり矣、然りと雖も一得一失一短は互に呼吸して共に相消長するは事物の自然にして、広く之れを和漢欧米旧跡に徴するに亦未だ脱しざる処とす、然り而して頃日天下の民心靡然として新奇 観の事物論説を好み、沛乎として欧流に艶羨流連し、国家治安の策を講ずるは必ず先づ証するに欧州各国の治績を以てす、其最も甚たしきに至ては天赋民権自由権利等の説を主張し、終に以て君民同治は国家維持の良法にして共和政治は万民幸福の善政とす、急躁詭激或は以て社会の秩序を顧みず、此の弊や往て数閏年な

らば彝倫を紊乱残害し国家体を破壊するの禍を顕出し、我か皇国を提て何れの地に置かんも亦未だ知る可からず、嗚呼倫理滅絶天道傾頽揚墨耶蘇の害と雖も亦た何ぞ及はん、而して其横流の及ぶ処村閭孝弟の風を失ひ、郷里礼讓の道を忘れ、人々奢侈淫秩を極め、戸に勤儉を知らず、数年余年養ふ処の彝倫道德の遺風地を掃はんとす、語に曰く礼義廉恥是謂四維四維不張國乃滅亡すと、里に孝弟の修なく國に礼儀廉恥の風なくんば、豈に國家維持することを得んや、故に世の建築を營とする者は必ず先づ其基礎を堅固にして、而後に飛旋高閣を築く、草木の長大ならん事を欲する者は必ず先づ基本根に培養す矣、今や吾が徒同志天哉不期其感を同ふす、於此集合会同の則を設け常に養徳明倫の道を講し、國家數百年養ふ所の仁義忠孝の遺風をして、下は府縣郷里党に明かにし、上は國体を維持するの始めを為さんと欲す、之れを明倫会と稱す、蓋し仁義孝弟の事を行ひ、忠貞良潔の心を保ち、倫理を郷里に明かにして村閭信愛の風を存するは、君に忠に國を愛する基礎にして永く國体を保護するの本根たり、之れ則ち本会明倫の名称ある所謂にして、其主旨を約するに左の三綱を以てす、彼の天賦民権民約自由等の説を主唱し真理を滅絶し、秩序を紊乱するの斧鉞を取て輕浮急躁道義を破壊するの徒は我が類に非らざるなり。

三綱

- 一、尊王愛國の旨を体し倫理道德を明かにするを本務とす。
- 一、國体を維持し國權を擴張するを目的とす。
- 一、立憲帝政を希望す。

明倫会組織会の翌日の5月17日、平塚恰は毛利空桑に向かって「前日同人〔平塚恰〕商議の要領を述べ小川弘蔵の事に及ぶ懇囑あり、其れ國家の為に動かさしめよ、不遇米汁に弱ると」と述べ、明倫会組織の件および小川が貧困に苦しんでいることを語り、毛利に小川を活用することを頼んでいる。この記述と「初志録」の傍線②の「明倫会の周旋にて」という記述を参照すれば、つまり麗沢館は毛利・平塚らの周旋によって保守党の政治団体である明

倫会の下部教育機関となったわけである。小川は平塚・後藤らと共に毛利の門下生であった。⁶⁷

ところで、毛利空桑の筆記した明倫会に青少年を教育する機関を設ける意見書があり、⁶⁸それには「明治十五六年の交勤王愛國を主義とせるの士平塚恰等を指揮して明倫会を興さしむ。先人を推して渠師とし会長となし事皆な其指揮を待つ。蓋此会なる者は一の學校を設け俊秀の少年を教育して勤王愛國に向はしむるの目的なり。今日所謂政黨なり。此等勤王愛國の拳にして先人の同意を得、先人の名を掲げ先人を渠師とするに非ざれば人心を懐け來らしむる能はざる者あるなり」と記されており、麗沢館はこの趣旨に依って明倫会に加わった事がわかる。また『大分県政党史』に、西村県令と平塚が増川蚶雄や合志林蔵をして「名を育英に託して斯文學校を創立」させたと記述されている⁶⁹、明倫会が麗沢館をその配下に収めたことと軌を一にしている。保守派の一連の計画的な行動が窺われるところである。

再び「初志録」の記事を解釈すれば、平塚が月給を滞らせたため、小川は明倫会を脱会して自ら塾を經營することを考え（傍線⑦）、明倫会からの分離独立の理由を教育の政治からの中立性ということにして（傍線⑩）、広池らを教唆した（傍線⑨）。そして広池らと一緒に退塾後、新たに明倫学会を組織したと解釈できる（傍線⑬）。退塾後小川は「人の人爲る所以は何ぞや、徳性のみ。〔中略〕政黨を改て学会と為せば必ず心を愛公公平に存し大に文學を興隆し忠孝仁義を以て臣民の心腹に鞏固ならしめ、其徳性を涵養して以て文明の布置を匡翼賛成せば〔中略〕彼功利理論我か正道を乱る能はざるに至らん」という「政黨を改て学会を興す」趣意書を発している。⁶⁹

ところで『鶴崎市史人物篇』の後藤の項目には「同十六年小川含章・毛利元器等を聘して明倫義塾を經營し、少年の教育に力を尽し、從学するもの三百余人の多きに及んだ。しかし斯文学会というのが設立されたので明倫義塾を廢し、斯文学会の幹事に就いた」とある。明倫義塾と明倫会麗沢館、斯文学会と斯文學校とは同一であると推定される。もしそうであれば、後藤が明倫義塾を廢し斯文学会の幹事に就任したのは、小川が明倫会から麗沢館を独

立させたことと何らかの関係があると考えられる。事実先述の「明倫会関係書類」の中に「私立明倫校規則」があり、またこれとは別に「私立明倫校規則・私立斯文学校規則」という文書がある。その三つの規則は同じ筆者によって記されたもので、特に「私立斯文学校規則」は単に「私立明倫校規則」に手を加えたものにすぎなく、明倫校と斯文学校は同様の趣旨によって設立されたものであることが判る。ただ「大分斯文学会関係書類」によれば、斯文学校の設置願は明治19年3月10日に提出されており、明治17年の小川の脱会事件と斯文学校の設立とは関係ないようである。しかし斯文学会（東京の斯文学会の支部でもあった）は平塚や後藤などによって大分新報社を事務所として、少なくとも明治17年12月以前に設立されており、やはり小川の明倫会脱会事件が何らかの影響を与えていると推定される。

さて広池千九郎が小川の明倫会麗沢館退塾の「口実」に従い、後に「欺かれた」と感じたということは、当時広池は、

(1)西村県政に利用されることに対して不満をもっていた。

i) 明倫会の保守党的性格に反対（広池は自由民権派）。

ii) 藩閥政府に反対、もっと保守的（維新後の政治に不満）。

(2)教育は政治から独立していなければならないと信じていた。

のどちらかの可能性があったと考えられる。傍線⑩を考えれば(2)に近いのではなかろうか。ところが傍線⑪や「国権党の跋扈」という表現から見れば、広池は過激・不品行を嫌い、この時はまだ国権党に反対していたことが窺われる。つまり(1)―iという態度も含んでいた。小川は西村寄りかあるいは(1)―iiに属すると考えられる人物であるから、「中立」ということを小川が言い出したこともまた、広池にとって「欺かれた」と感じさせた要因であろう。

広池の作った詩文の中にも明倫会麗沢館からの退塾事件を窺わせるものがある。たとえば「小会記」という詩には、明治17年の紀元節（2月11日）に初めて同僚の学生七人で「大義」を談じたことが書かれており、麗沢館の現状に下満を抱えていることが推測され、また明治17年2月24日の日付のある詩には、麗沢館内に浩然とした雰囲気があること、自分は小川を扶けようと

いう気持ちがあることが書かれ、退塾の日の作には（退塾を題材としたもの）小川に殉ずる気持ちが表され、これに対し小川は、評でその全部を「以私意略削」ったことが記されている。ちなみに退塾後の所感を表した詩には、

相約義拳無後先 豈図終不得天全

回頭三十日余昔 今已解散真可憐

とあり、自分の「義拳」が失敗に終わったことを憐れんでいる事が記されている。

しかし、広池は大分県教育界の中心的人物の一人であった坂本永定から、明倫会を退会した行動は、過激であり、また君臣の大義や漸進主義に合っていないことを指摘され、もしそのような不品行な行動をするならば官立の学校には入れないと脅かされて（傍線⑪・⑬・⑭）、広池は「大目的」（修身齊家のために教師となること）のために、少々の不満をおさえた（傍線⑮）。坂本は小川らの行動を民権運動の一種と見なしていたと考えることもできる。しかし広池が自らの退塾を「義拳」と見ていたことは注目すべきことである。退塾の非を悟った広池は、大分に戻って小川を諫めたが容れられず、ついに6月明倫会麗沢館を退塾することになる。以上のように「初忘録」は解釈できる。

ところで小川含章の政治思想については、明倫会設立に深く関ったことや、『余の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』で広池が述べているように、彼が保守的な思想の持ち主であったことは明白である。しかし、西村県令を通じて平塚・後藤の指導下にある明倫会をも脱会したことは、二つの解釈の可能性を示す。その一は彼がそもそも政党なるものに反対（保守党にも反対）であるという解釈、つまり反藩閥政府の国権派であったという解釈と、やはり教育が政治に利用されることに反対していたという解釈である。坂本が、小川の行動（＝広池の行動）に対して「明倫会を退きたるは大に理に戻れり。因て速かに改過して明倫会に入るべし。若し而らざれば品行不正の廉あるを以て、到底県立官立の学校に入る能はず」（傍線⑯）と批判して

いることを考え合わせれば、小川は反藩閥政府の立場に立つ国権派に近い人物であったと考えられる。

4 退塾後の政治思想

広池千九郎が麗沢館退塾後指導を受け、関係を持った教師・人物は「初忘録」や「履歴二号」・「履歴三号」によれば、坂本永定・堤恕作・河野欣三郎・増川蛸雄・是石辰次郎・山田小太郎・渡辺玄包・鈴木間雲・新庄関衛・村上田長・佐藤蔵太郎など大分県の教育会を代表する人物であり、また豪農・旧上士層を代表する人物であった。特に*をつけた人物は「大分県共立教育会」発起人であった。大分県共立教育会（明治18年1月発足、大分新報社が事務所）は県令西村亮吉が会長であり、県令寄りの立場であったと考えられる。広池の論説「学校生徒実業を重ずる習慣を養成する方案」も西村県令が採用したものであった。

遺稿から判断できる麗沢館退塾後の広池の政治思想は、流行に流されず、教育（実学）を中心として、漸進的に社会・国家の改革・繁栄を図るというものであった。

「学校生徒実業を重ずる習慣を養成する方案」では、学問は実業を助け世界の幸福を維持増進する手段であること、貴賤の区別は治者と被治者との間にではなく、世を益することの多少の間にあること、官吏の資格は高尚の者を要すること、学問の目的は社会の福祉を増進するためであるから人は必ず学ばなければならないこと、を説いている。同様に教育の重要性について、「凡一國ノ政治ヲ害シテ、一國ノ進歩ヲ妨グルハ、無智ノ貧民ヨリ甚シキモノナシ」と述べ、したがって青年に、「立派ナル新日本ヲ組ツシ、其職務ヲ全フセント欲スレバ、忍耐ト勉強トノニツラ要シマス。諸君、念クハ、此ニツノ者ヲ、常ニ心ニ存シ、自治ノ精神ト権利義務ノ界ヲ正シ、決シテ、其職務ヲ忘レラレンコトヲ」と望むわけである。

みずからは、「五十以上にて国事に奔走、死を致すも可也」と記したように、国家に奉仕することを最高と考えていたが、さしあたっては、多くの貧

民の兒子を養い教育し、その中から英雄あるいは世の中に種々功績をたてる人物を出すことを目標にしていたことは、彼の教育観——教育により一歩一歩着実に社会を改革すること——を表している。

流行に惑わされないよう戒めている文章が「履歴二号」や『新篇小学修身用書』にあり、また偏向教育の弊害について次のように戒めている。

小学教員が自分の政治主義を公衆に演説し、あるいは自分の宗教を他人に説教することは、自分の信条を一人前でない児童に強制するという弊害があってよくないことである。もっとも小学教員でも自分の政治主義や信じる宗教はあるだろうが、これを挙動に現わし、児童に聞かせる事は許されないことである。同様に学科教授上においても、たとえば修身の授業で、漢学を好む者が西洋倫理を排斥して、もっぱら孔孟の仁義を主張したり、反対に洋風を好むものが西洋倫理一辺倒になること、あるいは算術に長ずる者がすべての事を計数に還元しようとする事、体操を好むものが兵隊の歩行起居を気取るようになることなどは避けるべきである。すべて政治と宗教の二事にとどまらず、自分の愛する一芸一術を奨励して、児童の知識を偏重させることは、自分の信ずる政治宗教を後生に強制することと同罪である。（意識した）

この文章は、広池が明倫会の政治性を嫌い小川と共に明倫会を退会し、さらに自分の同僚と小川の中立性に疑いを持ち、過激性を嫌って麗沢館を退塾したことを考え合わせると、深い意味のある文章のように思われる。

さらに「大分県教員互助会設立の主意書」で教員の福祉を求めたのは、数年前に比べると「神聖なる教育場裡を以て、一夢の客舎と認むるが如き出沒常なき無節操、無熱心の偽教育家、漸く其迹を潜め、皆多くは、将来に向て永く教育に従事せんことを決心せる真正なる教育者のみとなれり」と認識したからでもあった。

さて退塾後の広池の政治思想については、豊州新報社記者佐藤蔵太郎との出会い・別れの事件がそれを象徴的に表していると思われる。佐藤の勤めていた『豊州新報』とは、『大分新報』をついだ保守派の機関紙であった。広

池は佐藤との出会いについて、明治20年10月20日～27日まで大分県共立教育会に出席したときに知己となり、著述の事等を相談し、広池が地方通伝を請け負う代りに新聞を寄呈する約束をしたと記し、実際に山口・広島県下の征長事件調査記事を、西海小史あるいは扇城居士と号して寄書・通信している。また結婚についても相談するような間柄であった。さらに、広池は明治22年に大同団結運動で中津にやってきた佐藤を饗応している。

ところで、大同団結運動は、中津においてはどのように展開されたのであろうか。明治22年2月23日に熊本で大会が開かれ、6月には山口半七・宇佐美春太郎らによって『大分新聞』が発刊され、11月には長崎大会が開かれ、12月には『大分新聞』記者佐藤蔵太郎が中心となって大分県下青年大会が開催され、対抗して豊州会も12月に同志を糾合している。明治23年に入ると3月19日に改進黨の大会が開かれ、7月には九州同志会が結成され佐藤もそれに加わっている。9月には同志青年会が結成されている。以上より佐藤は大同団結運動における大分県の中心人物として活動していることが判る。そして佐藤は明治22年に保守党の機関紙『豊州新報』を辞め、『大分新聞』に入っているのである。明治22年3月以後下の記事以外広池は佐藤への言及をしていない。

廿二年三月、又、佐藤蔵太郎にも一円かして、其儘よい顔をして払はす。此人にして此事あり。人の心、信すへからず。

つまり広池は大同団結運動に関係を持った佐藤とはそれ以後連絡をとっていないのである。ここから広池は民党の政治運動には冷淡であったことが推測できるのである。

おわりに

広池千九郎は『中津歴史』を大分県共立教育会に寄贈する理由書に、旧藩政の景状等を文中に洩らすことなく忌憚なく論述したので、教師がこれらの事柄を生徒に談話すれば生徒は知らず識らずのうちに現今聖代のありがたき事を感想するに至り、大いに忠君の情を増発させることができるであろう

と記している。また『中津歴史』の「新世紀」の概要を記述したところでは、この世紀が旧藩士族の武士根性を発揮した時代であったこと、この14年間に於ける士族の運動は、士族にとっては喜ぶべき結果はもたらさなかったけれども、地方のためには大いに利益になったことが述べられている。つまり広池の意識の中には、維新を評価し、また維新後の中津の歴史を形作った主要因は（その試みは多くは失敗に終わったが）旧武士階級上流の努力の結果であったという思想があったと推定できる。

もしそうであれば、やはり広池千九郎にとって麗沢館は一つの転機であったと言える。つまりそれは第一に、中津市校で西洋流の民権論を学び、自由民権運動の影響を受けていたものが、麗沢館の小川含章の影響によって、漢学および国学の君臣の大義や、大義に殉ずることの重要性を学んだこと。第二に、広池にとっては生涯でただ一度の体制への反抗＝小川を擁して立った「義拳」を行ない、それに挫折したこと。第三に、その後、広池は教育を中心とする漸進的改革論に転向したと位置づけることができるのである。

以後広池千九郎は体制維持派に加わり、変革は教育を通じて図るという方向で進むことになったのである。

注

- (1) 広池千九郎の略歴について中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍、昭和57年より引用しておく。

神官を祖先とする半六、里えの長男として、豊前国下毛郡鶴居村永添字八並（大分県中津市大字永添八並2423番地）に生れる。永添小学校、中津市校を卒業ののち、1880永添小学校の助教となる。1885大分師範学校の応請試験（教員資格検定試験）に合格し、形田小学校、万田尋常小学校、中津高等小学校訓導をつとめる。その間、1889角はると結婚、翌々年には、最初の学術書といわれる『中津歴史』を編述した。1892歴史家を志し京都に出て、月刊誌『史学普及雑誌』を発行する。しかし、1895国学者井上頼図を通じ『古事類苑』の編纂に加わるため上京。その編纂に従事するかたわら、1905早稲田大学講師となり、

- 支那文典、東洋法制史の講義を担当、『倭漢比較律疏』（稿本1906）、『支那文典』『東洋法制史序論』『日本文法にてをはの研究』を著したのはこの頃である。1907伊勢の神宮皇学館教授に就任。翌年、支那法制史研究のため中国に渡り、1912「支那古代親族法の研究」にて法学博士号取得。1913天理教教育顧問、天理中学校校長として奈良に赴任。1915天理教の教典・儀式の改善を提唱するが、批判されその職をしりぞく。以後、労働問題の解決、「人心救済」のため全国各村を講演旅行。1928大著『道德科学の論文』を発行し、本格的にモラロジー教育の振興に尽力するに至り、1935道德科学専攻塾（広池学園）を創設する。
- (2) 『道德科学の論文』第1巻「第二緒言」126頁。
- (3) その大部分は『資料が語る広池千九郎先生の歩み』改訂版、昭和57年、広池学園出版部、661頁以下に掲載されている。
- (4) 「広池千九郎日記」昭和6年5月23日。
- (5) 宗武志「広池千九郎博士の平和論とその実践記録」『モラロジー研究』第6号1977、欠端実「広池博士の愛国心と世界平和」『社会教育資料』第92号、1984など。
- (6) たとえば道德科学専攻塾を開設した際に自分の住まいを麗沢館と名づけたことにも表れている。小川弘蔵については小川鼎三「小川含章の小伝」『社会教育資料』第46号97～122頁、同「小川含章と広池先生」『社会教育資料』第47号116～124頁、井出元「小川含章・井上頼国・佐藤誠実・雲照律師」『日本の近代化と精神的伝統』広池学園出版部、1985年などを参照。なお広池の中津大分時代については浅野栄一郎『広池博士の資料研究——中津時代——』広池学園事業部、昭和54年が詳しい。
- (7) 「初志録」『広池千九郎日記1』10～16頁、広池学園出版部、昭和60年。以下しばしば引用する「初志録」・「履歴二号」・「履歴三号」の全文は『広池千九郎日記1』1～78頁に収録されている。本稿では原文より直接引用し、参考に『広池千九郎日記1』の頁数を掲げた。引用にあたっては、カタカナをひらがなに、また適宜句読点をつけ、段落を設けた。なお『社会教育資料』第49・50号、昭和42年にも全文収録されている。
- (8) 「履歴二号」『広池千九郎日記1』25～43頁、「履歴三号」同57～78頁。
- (9) 小川鼎三「小川含章の小伝」120頁。
- (10) 広池千九郎『新篇小学修身用書』第1巻12～13頁、明治21年。「小川含章歳七十余なれども日々講堂にありて数回の講義をなし、又数多の生徒より質疑せらるるに応じ、而して少しく問あれば猶自ら書を読みて倦まず、毎夜生徒寄宿舎の一室に移り寒暑を論ぜず十二時に至るまでは必ず書に向ふ、其勤勉青年の子弟に優れり」という文章である。
- (11) この表現は明治18年3月頃および明治27年8月、明治38年12月、明治39年頃の履歴書や、『支那文典』第四版緒言、大正4年、『近世思想近世文明の由来と将来』77頁、大正4年などに見られる。
- (12) 大正年代の遺稿で経歴について触れているものが数点あるが、小川の名は漢学の師匠という以外には出てこない。ただ「予の研学と安心立命」と題する遺稿（大正4年頃）には、「第一巻 研学篇 一、予の郷里及び家庭 一、市校時代（士族の迫害） 一、大分遊学（師範落第・小川塾・国権党の跋扈・退学後の研学） 一、進修館蔵書読破時代 一、京都時代」と、「国権党の跋扈」という文言が残されていることが注目される。
- (13) 広池千九郎口述『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』5～9頁、広池千英、昭和16年。
- (14) 広池は毛利空桑について一言も言及していないが、小川は毛利の門下生の一人であり（注47参照）、国会開設に対するこの考え方は毛利の天壤社（反民権結社）結成の趣旨（鹿毛基生『毛利空桑』64～65頁、双林社、昭和57年参照）と同じである。
- (15) 「履歴二号」『広池千九郎日記1』34頁。
- (16) 『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』10～11頁。
- (17) 注目すべきことは、道德科学の道系表ができ、小川を含めて四人の師（特に小川と雲照律師・佐藤誠実）がクローズアップされたのが昭和時代になってからであるということである。つまり広池が小川の影響を大きく意識したのがこの時代以降のことであったと考えられる。広池が晩年になって小川の教えの中に意義を見出したと言えよう。この点井出氏の論考とは観点を異にしている。
- (18) 「述懐」、浅野栄一郎『広池博士の詩文の研究』広池学園事業部、昭和47年、24頁。以下詩文の引用は同書による。

- ①⑨ 「明智光秀論」。「我が邦の君臣の義の如きは厳然として犯す可からず。〔中略〕我が邦は皇家を以て君となし、以て相属隸す。故に彼の和氣氏・楠公の如きは能く皇家を扶く。皇家を扶ける者は忠臣となる。故に千歳の下、位、官幣大社となりて、民、皆、之を仰ぐ。将門・泰時は不忠の臣たり。故に百歳の下、仍ち賊名を負うのみ、其れ斯くの如し。故に皇家既に犯す可からず。〔中略〕それ明治王政復古の如き、大義、素より堅固の致す所なり。若し此の大義堅固ならずんば、則ち何ぞ今日の文化を視るを得んや」（浅野前掲書 181～182頁）というものである。
- ②⑩ 「頼山陽之讚」。
- ③⑪ 「題戦国」。
- ④⑫ 「偶成」。
- ⑤⑬ 「稲葉一徹荒木村重孰優論」。
- ⑥⑭ 「与玉川県令書」。
- ⑦⑮ 井出氏は広池は実学の実学思想を小川より受け継いだことを重視している。しかし中津市校が実学的色彩を持ち、また麗沢館退塾事件での挫折後広池が一教師として実学の重要性を説いたのに比して、もちろん小川の実学の中には実学的要素はあったであろうが、広池が麗沢館で学んだことは実学であるよりも、「大義」であり「立ち上がる事」であり、広池の意識に占める実学の割合は麗沢館以前および以後に比して少なかったのではなからうか。
- ⑧⑯ 「初忘録」『広池千九郎日記 1』12頁。
- ⑨⑰ 佐伯友弘「明治初期における福沢諭吉の大分県への影響——中津市学校の成立過程について——」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第24巻 315頁、1982。「明治六・七年より八・九年に至るの間は生徒の數本校付属女学校を合せ凡六百有余人に達し、一時関西第一の英学校なりと世上に公評を博するに至れり。〔中略〕本校は嘗に文学を以て他に率先するのみならず、其明治初年の比、世上未遑も古体旧套を脱せざるの時に当り、本校教師等既に校内に弁説会なるものを開き、古老の士人亦往々来て之に参列し、泰西新奇の演題を掲げて互に討論演説す。又会議法を講し、新聞紙を読み、自主自由を談し、殖産興業を説き、洋医を尊び、衛生を論し、時計を携へ、寒暖計を置き、避雷柱を設け、椅子・立机を用ひ、洋服を着、靴を穿ち、蘭燈を点し、巻烟草を吸ひ、牛肉を食ひ、乳汁を酸

- り、洋食を賞し、麦酒を飲み、磨刀・断髮夙に欧米の風化を学び、文明の利器を採用せしは、地方実に其淵源を本校の内に発せざるものなしと云」と広池は『中津歴史』(307～308頁)に記している。
- ⑩⑱ 『中津歴史』246～247頁には、「西御門皇学校の風専ら尊皇愛国を主とし、在学の学生皆悲歌慷慨の壮士にして、市校の急進に西洋実利主義的教育法を執り、進修館の依然として悠々支那貴族的主義的教育法により、学生多く惰怠柔弱なるを見て全く是等と相容れず、一に二者を呼んで外夷崇拜の無腸漢となす」とある。
- ⑪⑲ 山本千代蔵編『広池博士講演集』290頁、大正8年。
- ⑫⑳ 以下の記述は長野潔『大分県政党史』豊州新報社、大正15年を参考にした。大分県における自由民権運動の研究については、野田秋生「政社から政党へ——大分県の自由民権運動覚書——」『大分県地方史』第106・107号、昭和57年、および同「自由民権期の『地方自治』論——大分県民会・初期議会における——」『大分県地方史』第110・113号、昭和58・59年があり、また『大分県史 近代篇 1』236～275頁、昭和59年も参考になる。
- ⑬㉑ 「始本紙の発せらるゝや、地方未新聞の設なく、民智幼弱亦民権自由の何物たるを解するものなし、是時に当て本紙独専自由主義を執り、上下の区分内外の關係人民の権利義務を論明して淳々其蒙昧を開発し、且地方の休戚に関する事は一片片題洩す如くなく、不忌不憚縦横自在に論議して屢政府の忌諱に抵触すと雖、毫も一步の仮借を与ふることなく、公誠無私大に民福の増進に熱中せしか」と『中津歴史』(305～306頁)には記されている。
- ⑭㉒ 吉田豊治「西南戦争における大分県の対応」『大分県地方史』第104号41頁、昭和56年は、増田は内は民権・外は国権的な立場で反政府という点で西郷に与した、と説明している。
- ⑮㉓ 『大分県政党史』256～257頁。『中津歴史』299頁にも同様の記述がある。
- ⑯㉔ 長野綱良『大分県の畜宿山口翁』101頁、立憲民政党大分支部、昭和5年。大分立憲改進黨は正確には豊州立憲改進黨であったことは『大分県史 近代篇 1』263頁による。
- ⑰㉕ 『中津歴史』306頁。
- ⑱㉖ 野田秋生「紫溟会・明倫会・豊州会——大分県『保守党』の系譜(1)——」『大分県地方史』第118号3～5頁、昭和60年、および『大分県政党史』264頁。

- 67 野田「紫溟会・明倫会・豊州会」5頁。明倫会は政党であった(注48参照)。
- 68 『大分県政党史』264頁。
- 69 同上。
- 70 同上265頁。同様の記事は1029・1033頁にもある。
- 71 「明治十七年二月廿四日麗沢館劣生千九郎、憤本塾監事之近状、述懐、以密奉於夫子之足下」。
- 72 「明倫会関係書類」大分県立大分図書館蔵。
- 73 久多羅木儀一郎『鶴崎市史人物篇』429頁、鶴崎市役所、昭和32年。
- 74 注42に同じ。
- 75 同上の内。
- 76 毛利空桑著・毛利弘訳『川上紀行』8頁、毛利弘、昭和56年。なお小川は7月3日毛利に宛て「聚有志輩於大分県下某寺、開明倫社、皇張人倫以欲攻破民権党、僕聞先生來臨即不俟駕行先生……」という書簡を送っている。
- 77 十時英司編『毛利空桑全集』昭和9年所収の門人表。久多羅木前掲書429頁には小川が後藤に贈った詩が掲載されている。
- 78 「空桑毛利先生言行」坤(『毛利空桑文書』毛利空桑記念館所蔵)。国立国会図書館憲政資料室蔵マイクロフィルム版、リール19。
- 79 『大分県政党史』265頁。
- 80 「明倫学会を組織する趣意書」、注48に同じ。同文書中には自由民権の風潮に対抗して「明倫政党を編する所以にして万巴むを得ざる」という文言もある。
- 81 久多羅木前掲書429～430頁。
- 82 「私立明倫校規則・私立斯文学校規則」大分県立大分図書館蔵。
- 83 しかし前言だけは若干異なっている。明倫校の方が「本校ハ小学ノ科程ヲ卒業シテ後漢学ノ綱奥ヲ究メント欲スル者ヲ本科トシ初等師範学科ヲ修メント欲スル者ヲ別科トシ以テ生徒ヲ教育スル処トス此ノ生徒タル者ハ誠ニ以テ身ヲ修メ勤勉以テ志索ヲ遂ケ邦家ノ実益ヲ裨補セン事ヲ要ス」というものであったのに対して、斯文学校の方は「本校ハ小学ノ科程ヲ卒業シテ者ノ為メニ和漢ノ文ヲ講シ兼テ欧米ノ学ニ涉リ徳性ヲ修メ知識ヲ広メ人傑ヲ陶成シテ邦家ノ実益ヲ裨補セン事ヲ計ル所トス」と、欧米の学習も行なっていることが注目される。
- 84 「大分斯文学会関係書類」大分県立大分図書館蔵。

- 69 同上。69 注12参照。毛利は『先啓紀行』に、「及大分街、或有如客歳〔16年〕狗党遮与力請」と記しているから、(1)―ii の立場と言えよう。
- 67 「小会記」。
- 68 「明治十七年二月廿四日麗沢館劣生千九郎、憤本塾監事之近状、述懐、以密奉於夫子之足下」。
- 69 「送友人赴鎮台序」。
- 60 「無題」、浅野前掲書73頁。
- 61 同上。
- 62 大分県行政文書「教育会組立御届」(「明治十八年諸届書」の内)大分県立大分図書館蔵。河野欣三郎は創立時のメンバーの一人である。
- 63 「履歴二号」『広池千九郎日記1』27頁。論説は『大分県共立教育会雑誌』第17号7～9頁所収。
- 64 「学校生徒実業を重ずる習慣を養成する方案」『大分県共立教育会雑誌』第17号7～9頁。
- 65 「遠郷僻地夜間学校教育法」自序。僻地における教育の普及の重要性について述べた部分。
- 66 「青年之職務」。
- 67 「履歴二号」『広池千九郎日記1』32頁。
- 68 「履歴二号」『広池千九郎日記1』25～26頁。
- 69 「履歴二号」『広池千九郎日記1』33頁。「回顧すれば明治十三、四年の前後には、政党頻りに流行して田舎の如きも教員書生は勿論、少しく文字を読むものはみな自由改進の諸党に入り、只囂々と湧き立つるのみなりしが、人の思想忽ち変し、明治十六年の頃よりは、政党頻りに解散して学会頻りに起り、小学、中学には修身科を加へて実着を導き、天下靡然として漢学の実着主義を持ち出し、政談は生意気なりと云如くなりしが、今度明治十八年に至りしかば、英学亦勃起して、都会には英学の独習会頻りに起り、亦同時に小説稗史大に流行し、諸新聞紙の広告には小説の広告其八分を損むるの風あり。同年冬頃よりは東髪亦追々流行し、各地狂の如く之を擬するの風あり。亦同時に洋服の流行を来し、大に洋服屋の利益を博するに至れり」と記されている。
- 70 『新篇小学修身用書』第2巻46頁、鹿鳴館での夜会を批判した文章である。

㉗ 「小学教員ハ勉メテ偏頗ノ行ヲ去ルヘシ」『大分県共立教育会雑誌』第37号11～12頁。また英語教育の必要性（「大分県共立教育会雑誌』第65号20～22頁）を説くと同時に漢字教育の必要性（「学生ノ読書力」『同窓会雑誌』第1号1頁）をも説いている。

㉘ 『大分県共立教育会雑誌』第56号21～25頁。

㉙ 『大分県政党史』1048頁。「保守主義の人々に依つて計画された、創立当時直接社務に当つたのは衛藤欽吉、後藤田鶴雄、広瀬岸太郎の諸氏で、警部長補を辞した、平塚恰氏も発起者の一人であつた、〔中略〕十九年の九月新に佐伯町の佐藤蔵太郎氏を聘した、氏は郵便報知や大阪朝日等に記者を務めて其才気は当時有名なものであつた、佐藤氏は二十二年二月迄在社した、〔中略〕営業方面は増川蚶雄、沖本忠三郎、斎藤覚の諸氏が当つた」と記されている。

㉚ 「履歴二号」『広池千九郎日記1』42頁。またこの時増川蚶雄と、『新篇小学修身用書』の編述・出版の約束をしている。

㉛ 「履歴三号」『広池千九郎日記1』63頁。

㉜ 「履歴三号」『広池千九郎日記1』71頁。

㉝ 「履歴三号」『広池千九郎日記1』63頁。

㉞ 『大分新聞』は改進黨系の機関紙であつた（『大分県政党史』1062～1069頁）。

㉟ 「履歴三号」『広池千九郎日記1』68頁。

㊱ 『大分県共立教育会雑誌』第85号40頁。

㊲ 『中津歴史』237～239頁。

㊳ ただ「義拳」をなつかしみ、その時の純粋な気持ちを肯定する感情は、その後も広池の心の中に存在したと思われる。それは明治25年に広池が、増田宋太郎——西郷の乱に応じて兵を挙げた——の「肖像画」に彼の心情を称揚する「讃」を寄せているところに表れていると思われる。なお「讃」については浅野『広池博士の資料研究——中津時代——』306～318頁が詳しい。また増田と拳兵・自由民権運動の関係については岩田英一郎『中津自由民権運動史』昭和47年および松下竜一『疾風の人』朝日新聞社がある。

（付記） 本稿は昭和60年4月に脱稿していたが、その後野田氏の最近の業績を知り、また11月に大分県立図書館の調査を行なつて若干の手直しをしたものである。

Chikurō Hiroike in the Democratic Movement of the Meiji Era.

Ryōju Sakurai

The purpose of this paper is to make clear Dr. Hiroike's political thought in his early years (to the age of 25). Especially, the problem of his leaving the Reitakukan (麗沢館) Sinology school had great influence on his life.

Contents are as follows.

Introduction

1. Hiroike's description of the Reitakukan.

1) Questions about Ganshō Ogawa (小川含章) and the Reitakukan.

2) What did Hiroike learn at the Reitakukan?

2. Hiroike's political thought before entering the Reitakukan.

3. Reasons for leaving the Reitakukan.

4. Hiroike's political thoughts after leaving the Reitakukan.

Conclusion